

---

# 魔法と武器と女の子！？

焔の錬金術師ラビ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法と武器と女の子！？

### 【Nコード】

N1085BA

### 【作者名】

焔の錬金術師ラビ

### 【あらすじ】

魔法、それは女の子にしか扱えない、それがこの世界の常識だった、だが、アイリス・フレイアは見た、氷の魔法を使う少年を。そしてそいつがヴァルハラ魔法学校に編入してきた！？

## 第0話 出会い

「ウソ・・・こんな・・・ウソよ!!」  
青ざめながら後ずさる女の子がいた。  
目の前にはナイフを構える男が二人。

「ど、どうして?! 私の武装が・・・? エルフ! エルフ!!」  
彼女は必死で自らの武器の名を呼ぶ  
だが、彼女の手にあるリボルバーは反応しない。

「っへ、こんな女が武装乙女なんざ笑わせるぜ」

「ちようどいいじゃん、鬱憤がたまってたんだ、こいつで遊んでから  
殺そう」

「それ名案」

そっぴいながら彼女に近寄る男2人。  
後ずさるところがもうなくなりただ壁に背をつけている。

「そ、そんな、来ないでよ! 来るなあ!!」

彼女の魔力はもう無い、こうなつてはただの16歳の少女。  
ナイフを持った大男に勝てるわけ無い。

「いや! いやあああああ!!!!」

ついに両腕で自分の頭を抱えたとき、彼が現れた。  
それは突然だった。突然真上から

「よーいしょっと」

と、軽い声が聞こえ、男の1人の頭に着地した。

どうやらその衝撃が大きかったのか男は一発で気を失う。

「っな?!」

男が驚愕してナイフを彼に突き立てる。

だが、彼は右手を突き出して、<パチン>と指を鳴らした。

すると、男の手元からどんどん凍っていき、あっというまに氷漬けになった。

「ふう、っあ君、大丈夫だった?よかったらさ、ヴァルハラ魔法学校って

ところ押せてくれない?東の異国からきたんだけどまよちゃってさ」

さっきまでの出来事がウソのように思えるほど、彼は  
にごやかに彼女に話しかけた。

そう、彼女、アイリス・フレイアは目を見開いて彼に指差した。

「ど、どうして・・・」

「え?」

「どうして男に魔法が仕えるのよ!??」

## キャラクター紹介

キョウ・アイスレイ

氷の魔法使い、生まれつき左目が魔法を使うときだけ青く輝く、膨大な魔力を持つ。

当然魔法が使えることを隠していたキョウだったが

16歳の春、突然ある手紙が届いた。

内容はヴァルハラ魔法学校の編入届けとチケット。

その編入を受けた瞬間、彼はただの16歳から

『唯一男で魔法が使える者』と世間から騒がれることになった。

武器は二丁拳銃で精霊はアイス

ヒロキ・グレイシス

キョウの友人で愛称はロキと呼ばれている。

編入先で偶然再会、だが、魔法を使えるというのを

すでに知っていて『ついにばれたなあ』などと状況を面白がる。

騎士団に入っていて女の子をさげすむ視線で見る上司を嫌悪している。

得意武器はツインダガー

アイリス・フレイア

キョウに助けてもらった女の子、得意魔法は炎で

武器はリボルバーで、精霊はエルフ。

突然魔力が空になったことでピンチになったところを助けてもらい、一目惚れに近い感情を持つもツンとした態度を彼に取る。

ネーナ・ルビー

無邪気なお調子者だが意外と冷酷。  
キョウに興味をもって近寄るが次第に感情に変化が？  
得意魔法は光魔法で武器は鞭、精霊は狼

セシリア・マーガレット

得意魔法は風、武器は刀、精霊は猫  
お嬢様口調でプライドが高い、自分の弱みを見せることが無い意地っ張り。  
得意の風魔法で相手を翻弄させる。

アリア・セイブラッド

得意魔法は炎、キョウに助けてもらい彼に詰め寄る、魔法騎士団にの団長をしており町の騎士団とは衝突が多い。  
武器は大鎌、精霊は鷲

## ヴァルハラ魔法学校

魔法使いを育てる教育機関、とうぜん教師も生徒も女である。

## 騎士団

町の治安を守る、だが女を嫌っているのが多く女を子を産ませる道具としか思っていない。

## ギルレイ・シース

騎士団で女嫌いのトップともいえる。  
まちで学校の生徒を見るなり剣を抜くほど・・・  
そのせいかヒロキやキョウとは衝突が多い。

## 武器精霊

武器に宿る精霊、主の得意属性の魔法に合わせることが出来、魔力の供給などを行う。精霊にもランクがあり動物が一般ランク、人間の姿をしているのは最高ランクであり

膨大な魔力が無いもの以外制御できない。

アイス

キヨウの武器精霊、偶然の重なりで契約するも

彼に対して非常に従順であり彼の命令外のこともしてしまうので彼の頭痛の種の一つ。

裸になるのに恥じらいが無いのに言葉になると恥じらいを持つ  
特殊性癖の持ち主でもある。

## 第1話 編入

「……あゝ……やっぱり？」

出会いがしらの魔法を使ったらそうなるよなあ……

頭をかきながら彼は思った。

いや、むしろこのまま学校まで案内してもらえないかな？

「まあそれは学校に連れてってもらえたら教えちゃうかな？」

俺は笑いながら小首をかしげる。

彼女は『むむむ……』とうねった後に

「私はアイリス、貴方は？」

彼女は俺を軽く見上げて聞いてきた。

「俺はキヨウ・アイスレイ、変な名前だろ？」

そっぴいなから手を差し出す、アイリスはその手をつかみ立ち上がった

「いいえ、私は人の名前をバカにはしないわ」

と言つて、テクテク歩いていく

「え？ちよっ！」

「ついてきなさい、学校を案内してあげる」

それだけ言つてスタスタ歩いていく。

15分後……

仰々しい校門を通り抜け校舎を目にした俺は啞然とした。

「これが・・・学校？」

それは学校というより超豪華な屋敷、そう思わせるようなつくりをしていた

「それで？編入なんでしょ？学校長の部屋はその廊下をまっすぐ行つた突き当たりにあるわ」

アイリスはそれだけ言うときびすを返し  
寮と思われる屋敷に向けて歩き出した。

「あれはアレで・・・いい子なんだな」

俺は呟いて廊下の突き当たりに堂々と書いてある校長室のドアの前に立つ。

すると、ドアの中から何か大声で抗議？している声が聞こえた

「校長！貴方は本当にそんなことをお考えに！？男を学校に編入させるなど！」

「まあそういうな、アリア、それに彼の魔法はお前より上に行く」

「っ！そんなはずありません！魔法騎士団の団長が・・・男に負けるなど・・・」

・・・ああ、なるほど、俺のことでもめているのか。

まあわかつてはいてけどね、ここは『魔法』学校、生徒は女の子しかいないし

その大半はどこかの令嬢で男に耐性を持っていない。

そんなことを思いながらドアに耳を伏せていると

「っ！誰だー！」

と、声が聞こえて次の瞬間俺の真上に何かの刃が突き出てきた。

「っえ！？」

「そこかあ！」  
声と共にドアの残骸と一緒に俺は蹴飛ばされて壁に激突した、続いてなにか人影のようなものが俺の上にまたがり手にした大鎌を俺の首にあてる。

「・・・ちよお、いきなり？」

引きつった笑顔で俺はその人影に目をやる。

それは13、4歳と思える小さな女の子だった、女の子は俺の首に鎌を当てるや否や

「こいつ・・・男!？」

そういつて鎌に炎を纏わせる・・・熱い!熱い熱い!!

「学校長、こいつが・・・」

女の子は校長に目を向けて訪ねる、いい加減炎が熱い。

校長は俺を見てフツツと笑い

「思ったより早いじゃないか、ええ?アイスレイ」

「そりやどうも、それよりどかしてくれませんか？」

「そんなこといって、そんなに可愛い子に馬乗りになされて嬉しくないのか？」

「俺はロリコンじゃない」

と、俺の言葉に女の子の顔がピクツとする

「ほお、ロリコン・・・その子が幼女とでも？」

「違うのか？」

どうやらこれが引き金だったらしい、女の子は顔をズイツと近づけその真っ赤になった顔で

「私は16だああああ!!!!」

と、大きな声で叫んだ、そしてそのまま鎌を振り上げ一気に下ろしてきた

「え！？ちょ、マジ！！？」

俺は振り下ろされた鎌を両手で受け止めた

そして、そのままその鎌を凍らせる

「っな！？こ、氷魔法！？それも私の魔力をしのぐほどの・・・」

「だから言っただろう、アリア、いい加減に下がちな」

「で、ですが」

「下がれ」

校長の冷ややかな目がアリアと呼ばれた少女を貫く

「っ、はい、わかりました」

アリアは俺から降りてペコリと頭を下げてドアの横に立つ

「お前も、いい加減中に入ったらどうだ？」

「言われるまでも無い」

俺は冷たく言い放ち立ち上がる、そしてそのまま校長の前に立つ

「で？どういうことっすか？」

「どうもこうも無いだろう？編入さ、編・入」

そっぴいなながらケラケラと笑う美女

俺はその笑顔を知っているからこそ腹が立った。

本名は知らない、たぶん誰も、俺も知らない

通り名はクラッシュ・マザー、その名の通り破壊魔法を

得意とする魔女、そして、その実年齢は見た目の数百倍はある

見た目こそは20代のうら若き美女だが、中身は冷酷冷淡、

人を殺すのになんのためらいもない・・・。

かつて俺を破壊した女……。

「俺がその編入を届けるとでも？」

俺は右手に魔力を集中させて氷の結晶を作る

「今の俺ならあんたに負けはしない」

「おやおや、左目は使わないのか？」

にやりと笑った魔女は俺の左目を見る

その目は青く輝いていない、普通の漆黒の眼……。

「あんたに壊されたせいで魔力を上手く制限できないのさ」  
俺は左手で左目を隠すように覆う。

「残念だねえ、あんなに綺麗な青い瞳なのに」

「それを壊したのはあんただろ？マザー」

「つぶ、まあいいさ、それよりも、この制服に着替えな」

「俺はどこから通うんだ？」

「女子寮」

「いつペン氷漬けになってみるか？ババア」

「冗談さ、とりあえずエリアが部屋を用意してある、そこに暮らし  
とけ」

そういつて先ほどの女の子を呼ぶ

俺の目の前来た彼女は俺の首の下ほどに頭が位置している

ホントに小さいなあ……。

そういえば先ほどのアイリスと呼ばれた子も結構小さかったな、こ

こは幼稚園か？

「アリア・セイブラッドよ、ついてきて」  
それだけ言ってスタスタ歩いていくアリア  
そして、先ほどの寮と思えるところまで来た  
「君はこの333号室に住んでもらう」

「結局女子寮かよ!？」

「贅沢抜かすな、私たちだってホントは嫌なんだぞ？」  
そういつて中に入る、俺はアリアにそつとついていく  
うっわ、通るとこ女の子しかいねえ……。  
333号室・ここか

「荷物を置いたら下に来い、町を案内する」

「はいはい……」

アリアはドアを閉め、俺は部屋を見る。  
それなりに綺麗な小部屋だった、棚なども置いてある  
「結構設備はいいのね・・はあ・・」

俺は荷物を置いて、アリアが待つ下に行った。

「遅いわよ、何をしてるの!」

「男口調なのか女口調なのかどっちだよ・・」  
俺はため息を吐きながらアリアの元に歩いていく

そして、学校からはなれた町に下りた、そこは活気付いていて  
みんな穏やかな人ばかりだ、だが、アリアはある集団を見て顔を歪  
める。

「アリア？どうした？」

「いや・・・なんでもない」

そういつて後ろを向いた瞬間

「よお、化け物学校の生徒さんじゃねえか」

と、なんか癪に障る声が聞こえた。

アリアはこめかみに血管を浮かべ大鎌を呼び出し

「なんだと？」

と、男を睨みつける、どうやらこの男は騎士団らしい・・・。

「ああ？聞こえなかったのか？化け物は化け物屋敷に帰れ」

「貴様、その口を二度と利けないようにしてやる！」

「スタアーーーーッブ！！ダメだつてばアリア、一般人だろ！？」

なんか鎧は着てるけど魔力を帯びた鎌にかかっちゃえば

一刀両断なんて楽なものだ。

俺は間に入り仲裁をした、だが、男はそれを見て調子に乗ったのかアリアを思いつきり蹴飛ばした

「きゃっ！」

と、短い悲鳴と共にアリアはしりもちをつく

俺は一瞬頭に血が上る、こいつ、女を普通にけり飛ばした？

「ったく、化け物風情がよお、オイ！お前等出て来い！」

男は両手を叩いて誰かを呼んだ、すると、町の住民の影からチヨコチヨコ鎧を着けた

男達が姿を現した。

「さあーて、今回の獲物は魔法騎士団の団長様だぜ？」

男が剣を抜いた、それと同時に他の男供も剣を抜く。

「つく！」

アリアは立ち上がり鎌を構える、だが、人数は15人近くいる。

流石にアリアの鎌だけじゃ無理があるだろ・・・

「ただ俺は武器精霊持つてないしな。」

「さあて!!その生意気な面を泣き顔に変えてやる」

男が声を荒げた瞬間、俺の中で何かが切れた

「よおし、なら一番手は俺・・・がっ!?!」

一番アリアの近くにいた男のアゴに氷のハンマーが襲う

下から突き上げられたそれは男のアゴを砕いて気絶させる。

「ああゝあ、せっかく可愛い女の子と町のデートしてたのに、邪魔しやがって」

俺は自分の中で何かが急激に冷めていく感覚がした。

左目が、漆黒の瞳から、青い瞳に変わっていく。

「男尊女卑つて奴か?まあどつちにしろ下衆なもんだ」

自分の周りの空気がだんだん冷たくなっていく。

「っな・・・なんだよ」

「こいつ・・・なんか変だぞ」

男が騒ぎ始める、俺はその周りを氷の柵で囲み逃げ場をなくす。

「逃げるなって、ほら、お楽しみなんだろ?俺も混ぜろよ」

俺はいつの間にかまたへたり込んでいたアリアを抱きかかえ

「さあ、俺から彼女を奪つて見せるよ、下衆ども?」

目の前の異常事態に混乱する騎士団にさらに一言挑発する

騎士団はその目を見開き剣を振り上げ

「こ、この化け物がああ!!」

叫びながら一気に振り下ろす、それを氷の壁で交わす

「なにぃ!?!」

「時間切れだ」

俺は冷たく言い放ち回りの温度を一気に低下させる

「さて、女の子を大事にしないクソヤロウは氷漬けにでもなってる」  
にっこりと笑って足を一回くタンツ>>と足踏みする。

その瞬間周りの空気が氷に変わり騎士団の男共がどんどん凍り付いていった。

柵の一部を溶かして外に出る俺とアリア、

そして氷漬けになっている騎士団を見据えて

「大丈夫、その氷は2時間くらいあれば溶けるよ」

それだけ言ってアリアを抱えたまま学校に戻った。

アリアは終始赤面状態のまま部屋に戻り、俺も部屋に戻った。

そして、左目が漆黒に戻ったとき、俺は後悔の念が押し寄せてきた。

またなっちゃったよ・・・アイスレイに・・・。

## 第1話 編入（後書き）

はい、かるーくゆるーく自己満足に書いていくので  
気にしないで流しといてくださいアwwww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1085ba/>

---

魔法と武器と女の子！？

2012年1月6日10時49分発行